

総合科学の基礎C  
哲学思想の基礎

2018/06/08  
理解し考える力②

学生のコメント:言葉の意味

- 「今回の授業では、知性や理性といった言葉場の意味について学んだ」。
- 知性、理性、悟性など、哲学上の基本概念を正しく理解することが目的。
- 知性
  - ノース(理性):理解する力。作り出す力。
  - インテクトゥス(理性):理解する力
  - Understanding(悟性):理解する力
- 理性
  - ログス:計算
  - ラチオ:計算

ノースの訳としての「理性」と、ログスの訳としての「理性」は異なる、というのが前回の要点。

近代哲学における典型的な「理解」の理論

われわれのすべての認識は感官から始まり、そこから悟性 (Verstand) へと進み、理性 (Vernunft) において終わるが、理性を越え出るとは、直観の素材を加工してそれを最高の統一にもたらしべきより高次のものは、何一つとしてわれわれのうちには見いだされない。

- カント『純粋理性批判』超越論的弁証論・序論(坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』pp.133-134)

英訳

All our knowledge starts with the senses, proceeds from thence to **understanding**, and ends with **reason**, beyond which there is no higher faculty to be found in us for elaborating the matter of intuition and bringing it under the highest unity of thought.

(By Norman Kemp-Smith 1929)

悟性や理性とは具体的には

悟性が規則を介して諸現象を統一する能力であるとすれば、理性は、諸悟性規則を原理のもとへと統一する能力である。理性は、それゆえ、決して最初の経験ないしはなんらかの対象にかかわるのではなく、悟性にかかわり、かくして悟性の多様な認識にアプリアリな統一を概念によって与えるのであるが、このアプリアリな統一は理性統一と呼ばれてよく、それはまた、悟性によって遂行される統一とはまったく別種のものである。

**Understanding** may be regarded as a faculty which secures the unity of appearances by means of rules, and **reason** as being the faculty which secures the unity of the rules of understanding under principles. Accordingly, reason never applies itself directly to experience or to any object, but to understanding, in order to give to the manifold knowledge of the latter an a priori unity by **means of concepts**, a unity which may be called the unity of reason, and which is quite different in kind from any unity that can be accomplished by the understanding.

- understandとreasonが、intellectusとratioからきれいに逆転している。

## 翻訳は難しい

- 「同じ言葉でも時代や国によって意味が異なっているが、そもそもの意味を理解することで、哲学においてその言葉が持つ本当の意味を見出すことが重要である」。
  - 翻訳とは、「同じ意味を別の言語に移そう」という試みです。
  - 一語で置き換えることが困難な場合もあるが、文章で説明すれば、たいてい理解可能になる。
  - しかし、哲学用語だと、文章にするわけにもいかないので、元の言葉の意味の一部が切り捨てられることにもなる。

## たとえば、

- 「存在」
  - ギリシア語では、「オン:ον」ないし「ウーシア: Οὐσία」=ギリシア語のBe動詞の名詞形。
  - 英語だと、Being。
  - Be動詞の意味=存在(実在existence)と、「～だ」(繫辞copula)。→「存在」では半分しか訳されていない。
  - 哲学の主要なモチーフの一つである「存在論: Ontology」が、日本語では理解しがたい原因の一つ。(最終セクションで扱う予定)

(先週の続きの後)

## アリストテレスの「能動知性」

『魂について(心とは何か) Περὶ Ψυχῆς』第3巻第5章

自然全体においては、あるものは各類にとって質料(これは可能態において、各類のすべてであるものである)であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持つる関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである。

(訳文は桑子敏雄1999)

## 英訳

The same differences, however, as are found in nature as a whole must be characteristic also of the soul. Now in nature there is on the one hand that which acts as material substratum to each class of objects, this being that which is potentially all of them: on the other hand, there is the element which is causal and creative in virtue of its producing all things, and which stands towards the other in the same relation as that in which art stands towards the materials on which it operates.

(By Edwin Wallace 1882)

(この理性:ヌースは)本質において現実態であって、分離されるものであり、作用を受けないもので、純粋である。

現実態にある理論的知識は、その対象と同一である。が、可能態にある理論的知識は、一人の人間においては、時間的により先なるものである。しかし、人類全体としては、時間的にも、より先のものではなく、ある時には思惟し、ある時には思惟しないということはない。

分離されているときに、まさにそれであるところのものであり、それだけが不死で永遠である。

This phase of **reason** is separate from and un compounded with material conditions, and, being in its essential character fully and actually realized, it is not subject to impressions from without:

though knowledge as an actually realized condition is identical with its object, this knowledge as a potential capacity is in time prior in the individual, though in universal existence it is not even in time thus prior to actual thought. Further, this creative reason does not at one time think, at another time not think

and when separated from the body it remains nothing but what it essentially is: and thus it is alone immortal and eternal.